KEUM JONG AE
琴 鍾 愛

学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文博第 193 号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科（博士課程後期3年の課程） 言語科学専攻
学位論文題目	**日本語方言における談話展開の方法**
論文審査委員	（主査） 教授 小林 隆　教授 齋藤倫明 教授 千種眞一 助教授 大木一夫

論文内容の要旨

1. 本研究の目的

現代の方言は、共通語化が急速に進んでいる。しかし、それにもかかわらず、実際、外来者が地元の人と会話をしていると話がなかなかうまく進まないということをよく聞く。それは、音韻、アクセント、語彙、文法など、言語の構造面では共通語化が進んだとしても、その地域特有の話の進め方が未だに存在しているからだと思われる。すなわち、談話展開の方法にはある程度地域差が認められると考えられる。最近、ようやくこのような談話展開の方法の地域差についての研究が行われ始めているが、主観的事例研究といった、その方法論における問題点が指摘されている。

本研究では、従来の談話展開の地域差研究において指摘されてきた方法論の問題点を踏まえ、新たな研究方法の開拓を目指すことを試みる。特に、話者が情報内容を効果的に伝えるために使用する談話標識に注目し、その出現傾向を客観的に示すことで、談話展開の方法の地域差について考察する。

対象としては、本研究では、東北方言の代表として筆者の居住する仙台方言に注目する。また、日本の代表的方言である東京方言、大阪方言を取り上げる。そして、それらの地域の高年層話者が説明的場面において、どのような談話標識を用い、どのように話を進めていくのかを、談話標識の出現傾向を分析することで明らかにする。また、これらの3地域の談話標識の出現傾向を比較することによって、談話展開の方法からみた日本語方言の地域差の一端について論じたいと思う。

さらに、方言の研究において、このような地域差とともに重要な柱として位置付けられている世代差について、仙台方言を例として考察し、各世代の談話展開の方法がどのようであるかを明らかにする。

2. 先行研究とその問題点

この分野における先駆的な研究として有名な久木田恵（1990）「東京方言の談話展開の方法」『国語学』162は、東京方言と関西方言の談話を対照させ、談話展開の方法には地域性が認められると指摘している。そこでは、（A）文の内容と（B）文頭、文中、文末のキーワードとなる語に注目し、東京方言は主観的説明が多く、「ダカラ」「ホラ」「ネッ」をキーワードにして相手に反論の余地を与えず、強引に話者の主張を押し付け、納得させていく「主観直情型」をとるとしている。それに対して、関西方言は客観的説明が多く、「ヘター」「ヘタラ」「ホイデ」などの接続詞によって説明を累加する形で、相手に続きを期待させながら談話を展開する「客観説明累加型」をとるとしている。また、久木田は、その後、北部東北方言を取り上げ、北部東北方言は「ダカラ」「ホラ」「モノ」をキーワードとする「理攻め依りすがり型」と認定し、「ダカラ」「ホラ」の頻用など、東京方言との類似性を指摘している。

このような久木田の研究は、従来の音韻、アクセント、語彙、文法の地域差が中心に行われてきた方言研究の世界で、ひとまとまりの談話全体を取り上げ、談話展開の方法にも地域差が存在することを証明した画期的な研究である。また、その後の談話展開の方法に関する研究にも多大な影響を与えており、分析方法においてもこの久木田の研究に従うものが多い。

しかし、それらの研究の重要な柱である、（A）文の内容（以下、本研究では「情報内容」と呼ぶことにする）を対象にした客観的分析方法は難しく、未だに確立していないと思われる。また、このような情報内容はどのような話題が選ばれるかによって左右される面が大きく、同じ条件での比較が困難である。また、（B）キーワードについても、事例研究の枠を超えて体系的、数量的に論証するという課題が残されている。

そこで、本研究では、久木田の分析の枠組みを参考にしながらも、特に、（B）キーワードとなる語、すなわち、本研究における談話標識に注目し、それを体系的、数量的に分析することで、各方言における談話展開の方法をより客観的に示すことを試みる。談話標識を取り上げる理由は、情報内容はどのような話題が選ばれるかによって左右され、同じ条件での比較が困難であるのに対して、談話標識は話題の影響を受けにくく、具体的形式として客観的分析に耐えうるからである。情報内容については今後の課題とし、ここでは、談話標識の面から談話展開の方法を検討していくことにする。

3. 研究方法

3.1 談話、談話標識、談話展開の方法

ここでは、本研究における「談話」「談話標識」「談話展開の方法」の定義及び対象範囲について述べる。

「談話」とは文より大きい言語単位で、あるまとまりを持っている文の集合である。本研究では、各方言の談話展開の方法を明らかにするため、会話のやりとりの中で、１人の話者が相手の情報要求に対して説明を行っている説明的場面を用いる。研究資料として説明的場面を取り上げる理由は、２人以上の話者が関与するやりとり場面より、説明的場面は比較的分析が容易であり、まず、説明的場面の考察から開始することにした。ただし、説明的場面といっても、会話の中の一場面であることには変わりなく、ここでの方法や結果は今後、会話のやりとり場面の分析にも参考になると予想される。

「談話標識」とは談話展開を効果的に行うために話者が用いるもので、談話の中で情報内容とは直接関わらないが、話者がその情報を効果的に伝達するために使う形式であり、既存の文法カテゴリーを超え、様々な言語形式から成り立つものであるという立場をとる。この「既存の文法カテゴリーを超え」るとは、品詞の枠に関わらず、様々な形式が談話標識として機能しているということである。日本語では、接続詞、間投助詞、終助詞、副詞、感動詞、応答詞などが談話標識として機能していると言われている。

本研究では、各方言の説明的場面で使用される談話標識の中から、特に高い頻度で使用されるものを取り上げ、考察を進める。

「談話展開の方法」とは、「談話」において、話者がいかなる種類の談話標識をどのように使用して話を進めていくのか、その方法を指す。

3.2 調査の概要

本研究で用いる談話資料は、次の調査によって採集したものである。

①調査地域：宮城県仙台市、東京都品川区、大阪府大阪市

②インフォーマント：本研究で対象にした話者は〈表1〉のとおりである。

③調査時期及び調査場所：調査時期及び調査場所は〈表2〉のとおりである。

④調査方法：調査は面接による質問を中心に行った。すなわち、筆者が直接インフォーマントに会って旅行や地元の名物などの10項目にわたる質問をする。それに対して、話者が説明を行っている場面を分析対象にした。談話資料は仙台方言の高年層約23時間、仙台方言の若年層約10時間、東京方言約7時間、大阪方言約8時間程度の録音資料を文字化したものである。

〈表1〉インフォーマント構成表

地域	世代	男性	女性	合計	
仙台	高年層	11人	10人	21人	
	若年層	5人	5人	10人	31人
東京	高年層	9人	2人	11人	
大阪	高年層	5人	5人	10人	

〈表2〉調査時期及び調査場所

地域	調査時期	調査場所
仙台	2000年6月～2002年6月	インフォーマントの自宅、または、東北大学国語学研究室、仙台市内の喫茶店
東京	2003年11月～2004年3月	品川区区民センター、五反田文化センター
大阪	2003年11月～2004年3月	大阪市内の喫茶店

3.3 分析方法

本研究では、以下の分析方法によって、論を進める。

(1) まず、各方言の説明的場面で使用される談話標識を取り出し、それらの形式が談話においてどういう役割をしているのか、その機能を検討する。

(2) 次に、談話標識の出現傾向、すなわち、談話標識の出現頻度や組み合わせパターンを具体的事例とともに示すことで、各方言の談話展開の方法を考察する。

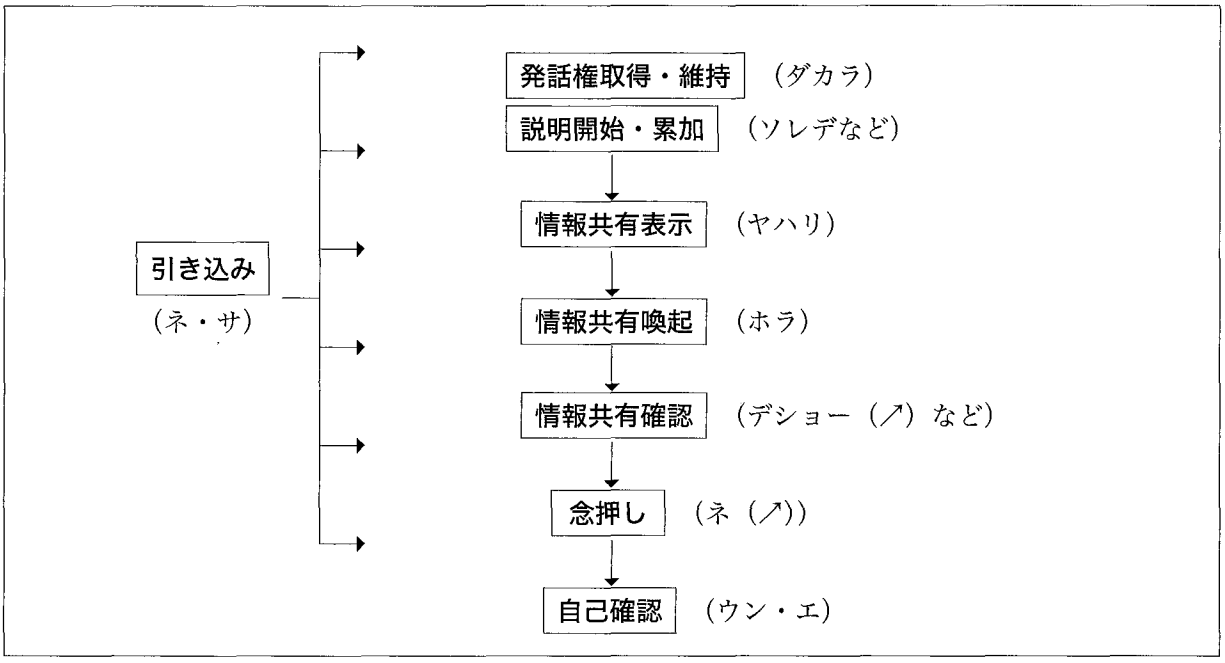
(3) 最後に、各方言の高年層話者の談話標識の出現傾向や仙台方言の高年層、若年層の談話標識の出現傾向を比較することで、談話展開の方法の地理的変異（地域差）や談話展開の方法の社会的変異（世代差）を明らかにする。

4. 仙台方言における談話展開の方法

仙台方言の伝統的談話展開の方法を明らかにするため、高年層を対象にし、その話者が説明的場面においてどのような談話標識をどのように用いて話を進めていくのかを、談話標識の出現傾向を分析することで明らかにした。

仙台方言の説明的場面で使用される談話標識とその機能からみた談話展開の方法をまとめると、〈図1〉のようになる。

〈図1〉 談話標識とその機能からみた談話展開の方法



この図において、談話標識は各文の中でこの順番（縦の矢印は出現順序）で出現するのが典型であると考えられる。ただし、引き込み形式「ネ、サ」はどの位置にも自由に入りうる（横の矢印は「ネ、サ」の位置）。また、この図は全ての談話標識が現れる場合を仮定しているが、実際は、この全ての談話標識が出現するわけではなく、各々の出現頻度に従い、いくつか組み合わさって現れるのが現実である。

つまり、仙台方言の高年層話者は、「ダカラ」で発話権の取得・維持を明確に表明、或いは、「ソレデ」で説明を開始・累加し、「ヤハリ」で情報の共有を前提にしていることを明示、「ホラ」で情報の共有を喚起、「デショー（↗）」などで確認するとともに、「ネ（↗）」で念を押しながら話を進めていることが明らかになった。さらに、「ネ、サ」で相手を話の中に引き込んだり、「ウン」で自己確認したりすることで話を進めることも特徴的である。

その中でも、仙台方言の説明的場面では、特に、情報共有確認形式である「デショー（↗）」、自己確認形式である「ウン」、発話権取得・維持に関わる形式である「ダカラ」が多用されており、「発話権取得・維持」（ダカラ）、「情報共有表示」（ヤハリ）、「情報共有喚起」（ホラ）に加えて「情報共有確認」（デショー（↗））を行うパターンや、「情報共有確認」（デショー（↗））を行った上でさらに「念押し」（ネ（↗））をするパターンが多く使用されることが明らかになった。

5. 談話展開の方法における地理的変異

日本の代表的方言である東京方言と大阪方言を取り上げ、その高年層話者が説明的場面においてどのような談話標識をどのように用いて話を進めていくのかを談話標識の出現傾向を示すことで明らかにした。

その結果、大阪方言で情報共有喚起形式「ホラ」（C）が認められないことを除き、ほぼ共通して仙台方言の〈図1〉のような種類の談話標識が使用されていることが分かった。その中でも、東京方言の説明的場面においては、特に、情報共有確認形式である「デショー（↗）」、発話権取得・維持に関わる形式である「ダカラ」が多用されており、「発話権取得・維持」（ダカラ）、「情報共有表示」（ヤハリ）、「情報共有喚起」（ホラ）に加えて「情報共有確認」（デショー（↗））を行う組み合わせパターンが頻繁に使用されている。

一方、大阪方言では、特に、自己確認形式である「ウン」、説明開始・累加形式である「ホンデ」がよく使用されること、また、「説明累加」（ホンデ）を明示しつつ、「自己確認」（ウン）で締めくくる組み合わせパターンが多用される特徴が認められた。

また、この東京方言、大阪方言の結果に、仙台方言の結果を加え、3方言を比較することで、談話展開の方法の地域差を明らかにした。その結果、各方言の説明的場面で使用される談話標識の種類にはある程度共通性が認められるものの、出現頻度や組み合わせパターンには地域差が認められることが明らかになった。すなわち、次のとおりである（仙台方言と大阪方言に特徴が強く現れているので、この2つの方言を先に解説し、最後に東京方言について述べることにする）。

(1) 仙台方言の談話展開の特徴

①相手への情報共有の働きかけ：仙台方言の説明的場面においては、「情報共有表示」（ヤハリ）、「情報共有喚起」（ホラ）、「情報共有確認」（デショー（↗））、「念押し」（ネ（↗））の使用頻度が、他の2方言に比べて非常に高いのが最大の特徴である。この特徴は組み合わせパターンにもよく現れており、「情報共有表示」「情報共有喚起」に加えて「情報共有確認」を行うパターンや、「情報共有確認」（デショー（↗））を行った上でさらに「念押し」（ネ（↗））をするパターンが目立っている。このように、仙台方言は、情報の共有を積極的に相手に働きかけながら談話を展開する方言であると言うことができる。これとは逆に、大阪方言は、「情報共有確認」（ヤロー（↗））や「念押し」（ナ（↗））の使用が低く、「情報共有喚起」（ホラ）の形式をまったく使用しないなど、情報共有に対する働きかけは非常に弱い。

②自己の発話権のアピール：「発話権取得・維持」（ダカラ）の使用率が大阪方言より明らかに高いことも特徴的である。すなわち、仙台方言は、談話の開始においても途中においても、常に発話権が自分（話者）にあることをアピールしながら話を進める方言であると考えられる。上記①の相手への情報共有の働きかけのような特徴と合わせ、話し相手に対して、「発話権取得・維持」（ダカラ）を明示しつつ「情報共有確認」（デショー（↗））を行うというパターンが多いのが特徴である。

(2) 大阪方言の談話展開の特徴

①話者自身による情報内容の確認：「自己確認」（ウン）の使用頻度が、他の方言より高いのが一つの特徴である。大阪方言は、情報内容について、仙台方言の「情報共有喚起」（ホラ）、「情報共有確認」（デショー（↗））、「念押し」（ネ（↗））のように相手との共有に力を注ぐよりも、「自己確認」（ウン）を行うことで、話を自分自身で納得しながら談話を展開する方言であると言える。

②説明継続の単純表示：「説明累加」（ホンデ）の談話標識の使用が非常に多いのも大阪方言の特徴である。この形式は、仙台方言に多い「発話権取得・維持」（ダカラ）のような自己アピールに関わる

ものではなく、単純に説明を継続することの合図にすぎないと考えられる。大阪方言は話の進行に際し、説明の継続を淡々とマークすることを好む方言と言える。上記①の話者自身による情報内容の確認のような特徴と合わせ、大阪方言では「説明累加」（ホンデ）を明示しつつ、「自己確認」（ウン）で締めくくるという組み合わせパターンが目立っている。

(3) 東京方言の談話展開の特徴

上で見た仙台方言、大阪方言の特徴ごとに、東京方言を検討してみる。

①仙台方言の「①相手への情報共有の働きかけ」：これに関わる談話標識の現れ方が大局的に見て仙台方言と大阪方言の中間に位置するように見える。ただし、「情報共有表示」（ヤハリ）や「情報共有喚起」（ホラ）を行った上で、「情報共有確認」（デショー（↗））を行うというパターンは仙台方言に類似している。

②仙台方言の「②自己の発話権のアピール」：「発話権取得・維持」（ダカラ）の出現状況が仙台方言とほとんど同じであり、この特徴を東京方言も備えていると言える。

③大阪方言の「①話者自身による情報内容の確認」：「自己確認」（ウン）の談話標識の使用頻度が最も低く、大阪方言の対極に位置する。

④大阪方言の「②説明継続の単純表示」：「説明累加」（ソレデ）の使用が仙台方言に近いくらいに抑えられており、大阪方言とは大きく異なっている。

以上、談話標識の出現傾向の面から3方言の談話展開の方法について検討してきた。結論として、仙台方言と大阪方言とは、それぞれ対照的な一つの典型として把握できる。すなわち、仙台方言は「ダカラ」で自分が発話権を持つことをアピールし、「情報共有喚起」（ホラ）、「情報共有確認」（デショー（↗））、「念押し」（ネ（↗））などで情報共有を積極的に働きかけていく方言であり、ひとことで言えば、自分の話を相手にわからせようと努力する「他者説得型」の方言であると言える。一方、大阪方言はそうした相手に対する働きかけは消極的であり、「ホンデ」などで話の進行を単純にマークしつつ、「ウン」などで自分で納得することに主眼を置く「自己納得型」の方言であると考えられる。東京方言は総合的に見て、両者の間に位置するが、仙台方言により近い面をもっていると判断することができる。

6. 談話展開の方法における社会的変異

方言の研究において地理的変異とともに重要な柱として位置付けられている社会的変異について、仙台方言を例として、高年層、若年層話者の2世代を取り上げ、各世代の談話展開の方法がどのようであるかを明らかにした。

その結果、仙台方言の若年層においては談話標識の出現頻度は低いものの、おおよそ第4章で示した高年層の〈図1〉の枠組みに合致していることが分かった。その中でも、仙台方言の若年層は、高年層に比べて、説明開始・累加形式である「ソレデ」や自己確認形式である「ウン」の頻度が高く、「自己確認」を行う組み合わせパターンが目立っていることが明らかになった。

上の第5章では、東京方言は発話権取得・維持形式である「ダカラ」、情報共有確認形式である「デショー（↗）」の出現頻度が高く、「発話権取得・維持」（ダカラ）や「情報共有表示」（ヤハリ）、「情報共有喚起」（ホラ）を行った上で、「情報共有確認」を行うパターンが多いのに対して、大阪方言は、説明開始・累加形式である「ホンデ」、および自己確認形式である「ウン」の出現頻度が高く、「説明開始・累加」（ホンデ）を表示したあと「自己確認」でしめくくるパターンが多いことを述べた。

今回の検討の結果、仙台方言の若年層は、発話権取得・維持形式である「ダカラ」や情報共有確認形式である「デショー（↗）」の出現頻度が低い一方で、説明開始・累加形式である「ソレデ」や自己確認

形式である「ウン」の頻度が高いことや、「自己確認」を行う組み合わせパターンが目立つことから、同地域の高年層の比べて大阪方言的な特徴も加わっていることが明らかになった。

7. 結論

本研究で筆者は談話展開の方法の地域差は、話者が情報内容を効果的に伝えるために使用する談話標識に反映されていると考え、談話標識に注目し、その出現傾向から談話展開の方法の地域差について考察した。

その結果、仙台方言と大阪方言とが対照的な一つの典型と認められた。すなわち、仙台方言の説明的場面においては、「発話権取得・維持」（ダカラ）の使用が多く、特に、「情報共有表示」（ヤハリ）、「情報共有喚起」（ホラ）、「情報共有確認」（デショー（↗））、「念押し」（ネ（↗））の使用頻度が、他の2方言に比べて非常に高い。また、組み合わせパターンでも「情報共有表示」「情報共有喚起」を行ってから「情報共有確認」を行うパターンや、「情報共有確認」（デショー（↗））を行った上で「念押し」（ネ（↗））を行うパターンが目立っている。それに対して、大阪方言は、「説明累加」（ホンデ）の談話標識や「自己確認」（ウン）の使用頻度が他の2方言より高く、「説明累加」（ホンデ）を明示しつつ、「自己確認」（ウン）を行う組み合わせパターンが目立っている。

これらのことから、仙台方言は自分が発話権を持つことをアピールし、情報共有を積極的に働きかけていくことで、自分の話を相手に分からせようと努力する「他者説得型」の方言であるのに対して、大阪方言はそうした相手に対する働きかけは消極的であり、話の進行を単純にマークしつつ、自分で納得することに主眼を置く「自己納得型」の方言であると結論づけた。また、東京方言は総合的に見て両者の間に位置するが、「発話権取得・維持」（ダカラ）や「情報共有確認」（デショー（↗））の出現が目立つことや、「情報共有表示」（ヤハリ）や「情報共有喚起」（ホラ）を行った上で、「情報共有確認」（デショー（↗））を行うというパターンが多用されることなど、仙台方言により近い傾向を示していることを明らかにした。

また、同じく、談話標識の出現傾向から、談話展開の方法の世代差についても考察した。結果として、まず、仙台方言の若年層は、談話標識の出現頻度が高年層に比べて全体に少ない傾向があることを指摘した。また、高年層で頻繁に使用される発話権取得・維持形式である「ダカラ」や情報共有確認形式である「デショー（↗）」の出現頻度が低い一方で、大阪方言で好んで使用される説明開始・累加形式の「ホンデ」や自己確認形式の「ウン」の頻度が高いことから、同地域の高年層の比べて大阪方言的な特徴も加わっていることを明らかにした。

本研究は、従来、音韻、アクセント、語彙、文法など、短い言語単位の研究が中心に行われてきた方言研究の世界で、今後の方言研究が開拓すべき談話展開の方法を対象に据えたものである。久木田を始めとする一連の研究が抱える方法論上の問題点を踏まえ、談話標識に焦点をしぼり、一定の方法論にしたがって分析を行った。つまり、事例研究ではなく、多くの談話資料を分析することで、仙台方言、東京方言、大阪方言における談話展開の方法の地域差や世代差を、より客観的に示すことができたと考える。久木田によって、東京方言は「ダカラ」「ホラ」「ネッ」を、関西方言は「ソシテ」「ウン」を、さらに北部東北方言は「ダカラ」「ホラ」「モノ」をキーワードとすることがすでに指摘されており、その点では、本研究は久木田の研究を一部追認したことにもなる。しかし、上に記したように、事例研究の限界を超え多量の談話データを計量的に扱った点、談話標識に注目し一定の方法論によって分析を行った点、また、南東北方言としての仙台方言を加え東京方言・大阪方言と比較した点や仙台方言を例として世代差を追求した点で、本研究は従来の研究より一歩前進を試みたものと言える。

本研究の最初に次のような仮説を提示した。―「現代方言では共通語化が進んでいるにもかかわらず、外来者が地元の人との会話の中で違和感を感じるというのは、音韻、アクセント、語彙、文法など言語要素の面で共通語化が進んだとしても、その地域特有の話の進め方がまだ残っているからではないか。そして、そのような談話展開の方法の地域差は、話者が情報内容を効果的に伝えるために使用する談話標識に現れているのではないか。」―この仮説は、日本語方言の一部を対象にしたものではあるが、本論文における以上の考察によってある程度証明できたのではないかと考える。さらに、仙台方言の検討からは、談話展開の方法には、このような地域による違いだけでなく、世代による違いも認められることが指摘できたと考える。

8. 今後の課題

最後に、本研究の問題点を指摘するとともに、今後に残された課題について述べる。

(1) 本研究では談話標識の使い方に注目し、談話展開の方法を考察した。しかし、談話展開の方法においては談話標識とともに、情報内容の面での考察も欠かせない要素として位置付けられている。今後、情報内容についての客観的分析方法を開拓するとともに、その方法を用いた考察が必要であると考える。

(2) 本研究では1人の話者が相手の情報要求に対して説明を行っている説明的場面を取り上げ、談話展開の方法の地域差や世代差を明らかにした。今後は、このような説明的場面だけではなく、典型的話し言葉の談話と言われる会話のやりとり場面にも注目し研究を進めていきたいと考える。

(3) 本研究では日本の代表的方言である東京方言、大阪方言を取り上げるとともに、筆者の居住する東北地方の仙台方言を取り上げ、談話展開の方法の地域差について明らかにした。今後、より視野を広げ、これらの方言と方言区画上、大きく異なるとされる九州方言（福岡）、中国方言（広島）、四国方言（高知）などについても取り上げていきたいと考える。

(4) 本研究では、談話標識の出現傾向から談話展開の方法の地域差について考察したが、このように地域ごとに談話展開の方法が異なる理由は何故か、談話展開が地域社会によって異なる事実は何を示すのかという問題についても、今後、考えていかなければならない。ただし、談話展開の方法の地域差が生まれる背景には、狭い意味での言葉の問題だけでなく、文化的・社会的要因が関わっていると考えられる。今後、それらとの関連を考えながら研究を進めていきたいと考える。

(5) 本研究では、仙台方言の高年層、若年層を取り上げ、談話展開の方法における世代差を明らかにし、仙台方言の若年層の談話展開の方法が大阪方言に近づく傾向を見せていることを指摘した。今後、こうした仙台方言の若年層の傾向が果たして東京方言など他の地域の若年層においても認められるか、さらに地域を広げ、談話展開の方法の世代差について研究を進めていきたいと考える。その際、若年層は高年層の特徴のどのような部分を受け継ぎ、どのような部分を更新しているのかという体系的視点や、若年層における変化はいかなるメカニズムで進行しつつあるのかという要因論への目配りが必要になると考える。

論文審査結果の要旨

本論文は、日本語方言における談話展開の方法の地域差および世代差について、談話標識の出現傾向の観点から明らかにしたものである。全体は理論・方法編にあたる第1章から第3章と、分析編にあた

る第4章から第6章によって構成され、第7・8章では結論と今後の課題について述べる。また、採集した談話の文字化資料を「資料編」として付ける。

まず、第1章では上記のような本論文の目的や構成について述べる。

次の第2章では、談話研究の現状と談話展開の方法の地域差に関する先行研究を概観し、その問題点と本論文の特色について述べる。すなわち、日本においては方言の談話研究はまだ日が浅く、事例研究の段階に止まり主観性が強いという問題点があることを指摘する。その上で、特に、談話標識に注目し、それを体系的、数量的に分析することで、各方言における談話展開の方法をより客観的に示すことが必要であると主張する。

第3章では、まず、本論文における「談話」「談話標識」「談話展開の方法」の定義を行う。また、調査地域およびインフォーマント、調査の時期、調査場所、調査の方法など、調査の概要について紹介する。さらに、本論文の分析方法として、説明的場面で使用される談話標識の機能を検討した後、その談話標識の出現頻度や組み合わせパターンを具体的事例と共に示すことで各地域や各世代の談話展開の方法を明らかにするという手続きをとることを述べる。

第4章では、仙台方言における談話展開の方法について高年層を中心に記述する。結論として、仙台方言の説明的場面においては、特に、情報共有確認形式である「デショー」、自己確認形式である「ウン」、発話権取得・維持に関わる形式である「ダカラ」が多用されることを述べる。また、組み合わせパターンでは「発話権取得・維持」(ダカラ)、「情報共有表示」(ヤハリ)、「情報共有喚起」(ホラ)に加えて「情報共有確認」(デショー)を行うパターンや、「情報共有確認」(デショー)を行った上でさらに「念押し」(ネ)をするパターンが多く使用されることを明らかにする。

第5章では、東京方言と大阪方言における談話展開の方法について高年層を中心に記述する。その結果、東京方言の説明的場面においては、特に、情報共有確認形式である「デショー」、発話権取得・維持に関わる形式である「ダカラ」が多用されており、「発話権取得・維持」(ダカラ)、「情報共有表示」(ヤハリ)、「情報共有喚起」(ホラ)に加えて「情報共有確認」(デショー)を行う組み合わせパターンが頻繁に使用されていることを述べる。一方、大阪方言では、特に、自己確認形式である「ウン」、説明開始・累加形式である「ソレデ」がよく使用されること、また、「説明累加」(ソレデ)を明示しつつ、「自己確認」(ウン)で締めくくる組み合わせパターンが多用される特徴が認められることを明らかにする。

さらに、第5章では、東京方言、大阪方言の結果と第4章の仙台方言との結果を比較することによって、3方言における談話展開の方法の地域差について論ずる。その結果、仙台方言と大阪方言とが対照的な一つの典型と認められることを明らかにする。すなわち、仙台方言は自分が発話権を持つことをアピールし、情報共有を積極的に働きかけていくことで、自分の話を相手に分からせようと努力する「他者説得型」の方言であるのに対して、大阪方言はそうした相手に対する働きかけは消極的であり、話の進行を単純にマークしつつ、自分で納得することに主眼を置く「自己納得型」の方言であると結論づける。また、東京方言は総合的に見て両者の間に位置するが、「発話権取得・維持」(ダカラ)や「情報共有確認」(デショー)の出現が目立つことや、「情報共有表示」(ヤハリ)や「情報共有喚起」(ホラ)を行った上で、「情報共有確認」(デショー)を行うというパターンが多用されることなど、仙台方言により近い傾向を示していることを明らかにする。

第6章では、仙台方言における談話展開の方法の社会的変異(世代差)について、高年層、若年層の2世代に分けて考察する。結果として、まず、仙台方言の若年層は、談話標識の出現頻度が高年層に比べて全体に少ない傾向があることを指摘する。さらに、高年層で頻繁に使用される発話権取得・維持形式である「ダカラ」や情報共有確認形式である「デショー」の出現頻度が低い一方で、大阪方言で好ん

で使用される説明開始・累加形式の「ソレデ」や自己確認形式の「ウン」の頻度が高いことから、同地域の高年層の比べて大阪方言的な特徴も加わっていることを明らかにする。

第7章では、本論文の結論を整理し、この研究の意義を述べる。すなわち、本論文は、従来、音韻、アクセント、語彙、文法など、短い言語単位の研究が中心に行われてきた方言研究の世界で、今後、開拓すべき談話展開の方法の地域差を対象に据えたものであり、これまでの一連の研究が抱えてきた方法論上の問題点を踏まえ、談話標識に注目し、多くの談話資料を計量的に分析することで、仙台方言、東京方言、大阪方言における談話展開の方法の地域差や世代差をより客観的に解明できたと述べる。

本論文は、最初に次のような仮説を提示している。―「現代方言では共通語化が進んでいるにもかかわらず、外来者が地元の人との会話の中で違和感を感じるのは、音韻、アクセント、語彙、文法など言語要素の面で共通語化が進んだとしても、その地域特有の話の進め方がまだ残っているからではないか。そして、そのような談話展開の方法の地域差は、話者が情報内容を効果的に伝えるために使用する談話標識に現れているのではないか。」―この仮説は、日本語方言の一部を対象にしたものではあるが、本論文の考察によってある程度証明されたと言える。

本論文は、対象地域は少数であるものの、日本語の主要方言について、談話展開の方法の地域差の発見に成功している。なにより、本論文で提示された方法論は、今後の同種の研究の手本となることはまちがいない。

よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。